

# 大城道則著『ツタンカーメン―悲劇の少年王』の知られざる実像―

(中央公論新社・二〇一三年九月刊・二一八頁・本体価格八〇〇円)

遠 藤 颯 馬

伝説的な古代エジプトのファラオ、ツタンカーメン。一九二二年一月四日にイギリスのエジプト学者であるハワード・カーターによって未盗掘墓が発見されて以来、どれだけ多くの者たちが彼に魅了され、その虜となってきたのであろうか。私たちのツタンカーメンへの関心の高さは、一昨年度に我が国で開催された展覧会の盛況ぶりからも分かるように、今日もなお変わらず続いていると言つて差し支えなからう。カーターは、自著である『ツタンカーメン発掘記』のなかで、以下のような言葉を残している。「わたしたちはまだツタンカーメン王の生涯の秘密をつかんでいない。影は動いているが、くらやみは決してとりのぞかれていない<sup>(1)</sup>」。では、カーターの王墓発見からもうすぐ一世紀が経とうとしている現在、私たちは、彼についてどの位知り得ているのであろうか。こう自問してみると、確かに、王墓の発見物語や見事な副葬品についてはすぐに思い浮かぶが、彼の治世についてとなると、私たちの持つ情報は、極端に少なくなってしまうことに気がかされるのである。しかしながら、今世紀に入り、発掘調査や研究の進展によって、徐々に彼の時代の様相が明らかになってきていることも事実である。本書は、エジプト学者である著者が、「はじめに」で述べているように、最新の研究成果を紹介・解説しながら自説を展開し、ツタンカーメンの生きた時代の再構成を試みるという意図で執筆されたものである。本書の構成は、以下の通りである。

はじめに

序章 ツタンカーメンとは誰か？

第一章 若き王の生涯 彼の生きた時代とは？

第二章 ツタンカーメンの死の謎 彼は殺害されたのか？

第三章 女性たちのすさまじき権力闘争 彼をめぐる女性たちとは？

第四章 王の副葬品 そこに秘められた意味とは？

第五章 後継者をめぐって 彼の死後エジプトで何が起こったのか？

終章 ツタンカーメンの死の真相とは？

評

書

まず、構成を見て、著者が近年刊行された河合望氏の著作<sup>(2)</sup>を意識して執筆したのであることが、評者には感じられた。両者とも「新書（一般書）」であり、一般読者を念頭に書かれているため、概説的な部分が多く含まれている。そのため、著述内容が重複している部分もあるが、基本的には、先行した河合氏が執筆しきれなかった内容を、著者が補っているように評者には思える。では次に、評者が気になった箇所を指摘しつつ、各章の内容を概観してみよう。

序章では、まず、以下の章でツタンカーメンについて考察の俎上に載せるために、彼の名前に関する情報をもとに、人物像にアプローチしている。また、ツタンカーメンの時代を理解するうえで一つの鍵となる、アメン神やアテン神について解説を加えながら、彼の生きた所謂アマルナ時代における古代エジプト社会の概況について述べられている。本章によって、議論の橋頭堡が築かれたといつて良いであろう。

77 第一章の冒頭では、「……しかし、治世が一〇年弱で、なおかつ二〇歳前に亡くなった王は古代エジプトにおいて少ない。当時の平均寿命や各王の治世年を考慮するならば、ツタンカーメンは、決して例外的な存在ではなかったのである」

(一七頁)と述べ、著者は、異質な「少年王」という周囲が勝手に作り上げたステレオタイプに対して、興味深い指摘をしている。本章においては、「生まれ故郷の持つ歴史背景、あるいは特有の空気は、少なからずその人物の人格形成に影響を与える」(四四頁)と著者が述べているように、ツタンカーメンに纏わるバックグラウンドが主要なテーマである。具体的には、ツタンカーメンに至るまでのファラオ(歴史的背景)や当時のオリエント世界の国際状況(社会的背景)、彼が生まれ育ったであろう、テルⅡエルⅡアマルナやそこにあったアテン神殿(思想的背景)について解説している。本章において、付言するならば、筆者は、アマルナは、「日乾レンガを主な建材として造られた町であったことから、石の構造物はもととあまりみられない。」(三九頁)としている。確かに、アマルナにおける建造物の主要な建材が、日乾レンガであったことは間違いない。だが、アマルナにおいて、最も重要な部分には、石材を用いたことが知られている。それが今日のアマルナで見られないのは、著者も示唆している通り、ホルエムヘブによって他の地域の建材として利用されたからである。<sup>(3)</sup>また、「中心であるアテン神殿でさえ日乾レンガで建造された」(三九頁)とあるが、確かに、二つのアテン神殿のうち、小神殿は、日乾レンガで造られたことが分かっており、著者の言う通り、「急いで遷都を実施するため」(三九頁)であったと解釈されている。しかしながら、もう一方のアテン大神殿は、初期段階から、建材として石材が用いられていたことが分かっている。それと、テルⅡエルⅡアマルナについて概観するのであれば、都市の全体図を添えるべきだったのではないか。テルⅡエルⅡアマルナの全体図は、様々な文献において再現されている。それがあれば、読者の理解をさらに助けることとなっただろう。

ツタンカーメンの死因について、第二章では語られる。従来の説(暗殺説)が、現在では否定され、最新の科学調査に基づく説(骨折・マリア説)が有力であることが紹介されている。そして、各々の説の問題点を指摘したうえで、著者の考えが述べられている。ツタンカーメンの死因について考えることは、エジプト学者にとって困難な問題である。というのも、この主題が、エジプト学のカバーする範囲である歴史学や考古学から逸脱するものであるからだ。恐らく、筆者

も古病理学を専門としているわけではないため、DNAやCTスキヤンの分析結果を基にした説を解説することには何らかの抵抗があったのではないか。しかしながら、科学的な分析によって提出された暗殺説や骨折・マラリア説を紹介した後で、古代エジプト史において暗殺されたファラオやミイラ、開口の儀式について説明を加えている。ここには、専門外の分野から得られた知見と自らの専門分野であるエジプト学のフィールドを絡めながら分かりやすく説明しようとする姿勢が垣間見られ、筆者のさすがの記述力を感じさせた。

ツタンカーメンの生きた古代エジプト第一八王朝は、その悠久の歴史のなかでも、「王の偉大なる妻」と呼ばれた第一王妃を中心として、とりわけ王家の女性たちの活躍が際立った時代であった。第三章では、その中でも突出した存在であり、ツタンカーメンを研究するうえでキーパーソンとなる王家の女性、ネフェルトイティとアンケセナーメンにスポットを当てている。そして、「ネフェルトイティとスメンクカーラーは、同一人物と考える説を支持する研究者もいる。著者はこの立場に立っている」(八〇頁)と述べ、このスメンクカーラー＝ネフェルトイティ説をもとに、多くの自説を展開している。この説は、スメンクカーラーが即位後に、ネフェルトイティ王妃が歴史の舞台から姿を消すことから可能性としては考えられ支持する研究者もいるが、アクエンアテンが治世の晩年にスメンクカーラーを共同統治王に任命していることへの説明がつかない。著者も述べているように(九二頁)、二〇〇五年のザヒ・ハワスらが行ったDNA鑑定の結果によると、ツタンカーメンの父親はアクエンアテンであることが分かっている。となると、父アクエンアテンは在位中に、息子ツタンカーメンを差し置いて、妻ネフェルトイティ(スメンクカーラー)を共同統治王に指名したことになり、アマルナ時代の異質さを考慮するにしても考えづらい。結局、現在のところは、どの説も説得力に欠け、アマルナ時代の王家の女性については、さらなる研究の進展が切望される。

続く第四章では、ツタンカーメン王墓から発見された副葬品から、彼の時代についての考察をしている。ワイン壺が「アテン神の私有地」からもたらされていたという事実から、著者は、「ツタンカーメンは名前を変え、公にアメン神信仰の

評書

復活を宣言したが、死去するまでアテン神信者であった可能性が高いのだ」(一三二頁)としている。また、王墓から副葬品として、合計一二五本の杖が発見されたという事実は、先述した科学的調査の結果分かった、ツタンカーメンは足が悪かったという説を補完する証拠としている。モノから手がかりを得て歴史を復元していく試みは、考古学徒として海外の発掘調査に参加した一面を持つ著者らしい学風であるという印象を評者は受ける。

しかしながら、注意を促しておきたい点もある。著者は、ラピスラズリとシリカガラスを例にあげ、両原材料ともにナイル河周辺では採掘することができないことから、「ツタンカーメンの生きた時代は、周辺諸地域との交易が盛んな時期であったことがわかる」(一三五頁)としているが、この物質史料だけでそこまで言い切るのは難しいと評者は考える。なぜなら、そもそもその原材料がツタンカーメンの治世下において外から輸入されたという根拠はないからである。著者が別の機会で述べているように、ラピスラズリは、古代エジプトの全王朝時代を通して、副葬品のみならず、多くの使用例が散見される<sup>(7)</sup>。そのため、ツタンカーメン王墓にあった遺物の原料が、当該時期において輸入されたとは、必ずしも限らないからである(つまり、ツタンカーメン以前の王の治世に輸入されたとも考えられうる)。いささか些事にもかかわらず、評者が気になってしまったのは、研究の実情を鑑みたからである。つまり、ツタンカーメン治世下の対外的な証拠を知る手がかりは、アマルナで見つかっている「アマルナ文書」のような史料は知られておらず、非常に限られる。よって、現在の史料からは、筆者の言うような、「ツタンカーメンの生きた時代は、周辺諸地域との交易が盛んな時期であったことがわかる」(一三五頁)とまでは、言い切れないのが現状であろう。

アンケセナーメン、アイ、ホルエムヘブというツタンカーメンの死後、古代エジプト王家で中心的役割を演じていく人物について着目したのが、第五章である。アンケセナーメンが、夫の死後、ヒッタイト王シユッピリウマに送った手紙を紹介したうえで、そのなかでしばしば好んで引用される一節を著者は紹介している。そして、その部分は、「おそらくどこかの段階で原文を確認せずにドラマティックに拡大解釈してしまったことが原因であろうと考えられる」(一五六頁)

という私見を提示している。また、アイとホルエムへブの政治的な位置づけについて、著者は、「將軍職にあったホルエムへブのほうが王位に近かった可能性が高かったのだ」（一六三頁）と述べている。しかし、これは、先述した河合氏の主張とは異にしていることを申し添えておく<sup>(8)</sup>。また、著者は、両者に確執が生まれた原因を、「アイのアドヴァイスを受けたアンケセナーメンが秘策として、ヒツタイト王へ充てた手紙を出したことをホルエムへブは許すことができなかつたのかもしれない。」（一七二頁）と述べている。しかしながら、この説もあくまで推測の域を出ておらず、ツタンカーメンと同時代を生きた三人の重要人物をめぐる歴史的状況についても、今後の実証的な一次資料の考察によって結論が導かれることが望まれる。

評書  
終章では、「ツタンカーメンの死の真相とは？」と題し、第二章で考察したツタンカーメンの死に纏わる問題について、彼の死後における周囲の人物の動向を追うことで再考している。本章の後半部で、著者は、当該時期の宗教面での状況を顧みつつ、「アメン神官団が組織的にツタンカーメンの王名を故意に削り取った可能性がある」（一九四頁）とし、ツタン

カーメンの治世においても、なお王は権力を持つ様々な神官勢力の扱いに苦慮していたと指摘している。この問題の当否については、読者の思索に委ねることとするが、「多神教Ⅱアメン神信仰」というのは、アテン信仰Ⅱ一神教というものに対する安易なイメージに過ぎず」（一九四頁）と言ったような、アマルナ時代の宗教観についての著者の叙述は範とすべき点があると思う。なぜなら、これまでの我が国の一般書や概説書におけるアマルナ時代の記述は、アクエンアテンのアテン信仰（一神教）ばかりが強調され、一般読者は、アマルナ時代Ⅱ一神教の時代という単純な構図に陥りがちであったからである。しかし、多神教の時代（アマルナ時代以外の時代）に対極する異質な一神教時代というイメージは、明らかにアマルナ時代の本質とはかけ離れたものである。著者が述べている民衆や地方神殿はもとより（二一九頁）、アテン神信仰の中核であったアマルナの地でさえも、ベス神やタウエレット神、トト神など様々な神が当該時期に信仰の対象となっていたことを示す史料が知られている。なかには、訣別したはずのアメン神のものすら見つかっているのである<sup>(9)</sup>。また、ア

マルナにあった神殿の全てが、アテン神のための神殿では必ずしもなかったことや、アクエンアテン王自身が伝統的なエジプト王として描かれている表象すら存在することも、アクエンアテン<sup>(10)</sup>強硬な一神教信者という偏向に対して再考を促していると言える。これらの記述は、欧米では、概説書などでも当然のこととして定着している。我が国においても、アクエンアテンやアマルナ時代に関する誤った歴史認識を一般読者がもたないためにも、指摘したような記述が一刻も早く是正されることを願うばかりである。

以上、本書の概要と評者が気になった点を指摘してきた。最後に、本書の全体を総括し、末筆としたい。本書は、「あとがき」で著者も述べている通り(一九九頁)、一般書であり、研究書ではない。そのため、評者が指摘してきた以外にも、学術的ではない(根拠が薄い)推測や自説などが含まれている。その点に関しては、実証性を何より重視する歴史学研究者という見地から本書を読めば、如何なものかと問題視する者もいるだろう。ただ、新書の本質的な役割は、特定の分野に関して分かりやすく、そして面白く記述することで、多くの耳目を引くことにある。よって、学術的な側面だけでなく、「読み物」として本書を見れば、その価値は全く違ったものとなるだろう。著者が、「読み物」としての叙述を指指したことは、「臨御の窓のイメージ<sup>(11)</sup>として近いのは、日本の皇族が国民に手を振る皇居の長和殿ベランダではないだろうか」(四〇〇―四一頁)や「日本の即身仏のように」(六八頁)といった明快な例えを挙げている部分からも分かる。古代エジプト文明は、私たちのそれと地理的に遠いだけでなく、文化的にも大きく異なっているため、一般読者が一読しただけでは、理解しづらい点も多い。そのようなことから、我が国の身近な例を挙げながら、説明をすることは非常に効果的であると言える。だが、専門用語に囲まれながら、研鑽を積んできた研究者にとって、分かりやすく一般読者に伝える程難しいことはない。このような箇所は、多くの一般書の執筆を手掛け、定評のある著者の真骨頂が発揮されている部分でもある。

ただ、「読み物」として見た場合、出典の明記が本文中にいくつか見られるが、不要であったのではないだろうか。出

典を実際に確認してみると、文献自体が、一般書であることが多く、その記述自体もどちらかといえば通説的な内容が多い。そのため、評者には何を基準として、出典を明記したのか分からなかった。もし、他の研究者の説を引用したいのであれば、「〜によれば」という程度で良かったのではないだろうか。また、章立ての順番も、評者には気になった。河合氏が大枠としてツタンカーメンの祖父アメンヘテプ三世の治世から第十八王朝の終焉までという編年体で構成したのに対し、本書はなぜこの順番で組み立てたのかという執筆意図が読み取れなかった。

今回、評者は、本書に先立って刊行された河合氏の著作を多く引き合いに出し、著者の説と衡量してきた。どちらの説がより説得的であるかを判断する力量を評者は持ち合わせてはいない。ほぼ同時期に出た著作を挙げた理由は他にある。研究者の層が薄く、これまで同一の論点における論争が殆ど行われてこなかった我が国の学会を思うと、同年代のエジプト学者による見解の不一致が見られること自体が待望ではなかったのか。このことこそが、評者に本稿を執筆させた最大の要因であった。

評書 本書が多くの読者に迎えられることを期待する。そして、本書を手にとった読者によって、また新しいツタンカーメン像が提供されるに違いない。

### 註

- (1) ハワード・カーター、(酒井傳六・熊田亨訳)『ツタンカーメン発掘記』ちくま学芸文庫、二〇〇一年。
- (2) 河合望『ツタンカーメン少年王の謎』集英社新書、二〇一二年。
- (3) Kemp, B. *The City of Akhenaten and Nefertiti: Amarna and Its People*. London, 2012. p.59. 今日、アマルナ時代の石材が最も多く発見されているのは、ヘルモポリスである。ホルエムヘブは、アクエンアテンの死後、早くて約一七年後にアマルナの建材の再利用に着手したと考えられている。

- 駒沢史学83号 (2014)
- (4) *Ibid.*, p.84.
- (5) Wilkinson, T. *Dictionary of Ancient Egypt*, London, 2005, p.231.筆者の他に、王妃ネフェルトイティとスメンクカーラーを同一人物と考える研究者は、Harris, J.R. "Nefertemutaten", *Göttinger Miscellen* 4, 1973, pp.15-17; Reeves, N. *The Complete Tutankhamun*, London, 1990; Jvan Dijk, "The Amarna Period and Later New Kingdom," in I. Shaw (ed.), *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford, 2000, p.272. なお、スメンクカーラー王の人物比定をめぐる議論については、河合望「スメンクカーラー王に関する覚書」『永遠に生きる―吉村作治先生古稀記念論文集』一一九―二二〇頁を参照せよ。
- (6) 河合、前掲書、二〇二二年、一三六頁。テローシユ・ノーブルクル、(佐貫健・屋形禎亮訳)『トゥトアंकアモン』みすず書房、一九六六年、一六三―一六五頁。
- (7) 大城道則『古代エジプト文化の形成と拡散―ナイル世界と東地中海世界―』ミネルヴァ書房、二〇〇三年、七九―八〇頁。
- (8) 河合望「アイとホルエムへブ―ポストアマルナ時代史の一局面―」『オリエント』第五一卷第二号、二〇〇八年、三五―三六頁。河合は、ホルエムへブは、摂政として行政の実権を握っていたが、出自と王家との関係を考慮したうえで、アイの方が後継者になる素地があったと主張している。
- (9) Jvan Dijk, *op.cit.*, 2000, pp.278-279.
- (10) ハンズという伝統的な表象とは、エジプト王が、武器で敵(異民族)を打ち据えている様子で描かれたもの(こと)を指す。Kemp, B., *op.cit.*, 2012, pp.17-118.
- (11) 臨御の窓は、英語では、Window of Appearanceというが、「出現の窓」という邦訳も存在する。例えば、近藤二郎『エジプトの考古学』同成社、一九九七年、一六三頁など。